映画上映会＆ワークショップ

性の境界線を越えて：

マグヌス・ヒルシュフェルトとアヴァンギャルド

西岡あかね

研究グループ「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」（科研・基盤 B：19H01244　代表：西岡あかね）が主催者となって、総合文化研究所で講演会を行うのは、昨年の九月に開催した田村和彦教授（関西学院大学）の講演会に続き、今回で三回目になります。

これまでの研究活動やイベントでは、アヴァンギャルドの女性性表象並びに男性性表象に注目し、その多彩な現われ方や展開形態に光を当ててきました。その過程で明らかになったのは、アヴァンギャルド芸術における新しい人間像の探求はしばしば、従来の本質主義的性区分や伝統的ジェンダーイメージからはみ出すような男性像、あるいは女性像を生み出してきたということです。そこで今回のワークショップでは、アヴァンギャルド芸術家たちが、市民社会における生活主体としての自らの身体や性に対する違和感を背景に、越境的な性のイメージを追求していく様に光を当てることにしました。講師には、神奈川大学の小松原由理さん（ドイツ文学）と熊谷謙介さん（フランス文学）をお迎えしました。

講師の発表に先立って、20 世紀前半のドイツにおける同性愛者解放運動（刑法第 175 条廃止運動）の中心的人物である、性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトが制作に協力した世界初の同性愛映画『他の人とは違って』（1919 年、監督：リヒャルト・オスヴァルト）の上映会を行いました。ヒルシュフェルトは、あらゆる人間には「男性」由来の性特徴と「女性」由来の性特徴が混在しており、その混合割合の度合いによって、中間的なタイプとしての同性愛者が出現するとする、いわゆる性の「中間段階理論」を唱えて、当時支配的であった同性愛の病理的定義を否定しています。すなわち、彼の理論に従えば、同性愛は自然的な性の混合形態の多彩な変種の一つであり、病的現象や倒錯、いわんや犯罪ではないというのです。この理論に基づいて、同性愛者解放運動の促進と啓蒙のために制作されたのが『他の人とは違って』です。弟子との同性愛的関係のために脅迫を受けて苦悩する主人公のヴァイオリニスト、パウル・ケルナーを、表現主義映画『カリガリ博士』に夢遊病者ツェザーレ役で出演したコンラート・ファイトが演じるなど、この映画はヒルシュフェルト周辺のサークルとアヴァンギャルドとの近さを示唆しています。また、少年時代のケルナーには、ヒルシュフェルトの恋人であったカール・ギーゼが扮していて、同性愛者が同性愛者の役を演じるという、現代のトレンドを先取りするような革新性も備えています。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

しかし、ヒルシュフェルト自身が、その理論的出発点において、いまだ伝統的な「男性性／女性性」の図式を保持していることを反映してか、男性同性愛者にことさらに「フェミニン」で美的、かつ退廃的な雰囲気を持たせたり、あるいは女性を専ら「母」あるいは「姉妹」としての役割に固定して描いたりするなど、この映画の伝えるジェンダーイメージにはいくつかの問題点も指摘できます。

以上のような点を踏まえて映画を鑑賞したのち、まず小松原さんに、ダダと同時代のベルリンにおける同性愛文化の関係を軸に、ダダの「クィア性」について論じていただきました。小松原さんは、ダダにはことさらに「マッチョ」なジェスチャーを強調するような側面がある一方、家父長制反対、あるいは市民的結婚制度や性規範への異議申し立てという言説において、クィアに開かれていく余地が十分にあったと指摘したうえで、その「クィア性」の展開に際してヒルシュフェルトとの接触が重要な役割を果たしていたのではないかとの仮説を豊富な資料に基づいて検証してゆきます。ヒルシュフェルトは自身の設立した性科学研究所を中心に、当時のベルリンで、狭い同性愛文化サークルを超えた文化的ネットワークを形成しており、ダダの参加者たちもその圏内に位置していました。さらに、ヒルシュフェルトという人物が、ダダイストたちにとっては性科学のアイコン的存在となっていたことに小松原さんは着目し、ダダのフォトモンタージュにあらわれたトランスジェンダー的イメージを、ヒルシュフェルトが収集した同性愛者の「患者写真」と比較しつつ読み解くという刺激的な試みを行っています。両者には手法としての類似性があるほか、そもそも規範概念の転覆を狙うダダのコラージュ美学には、ジェンダー・バイナリをかく乱する異性装の実践との潜在的共通性があるというのです。小松原さんの発表は、同時代の同性愛者解放運動の過程でますます明るみに出るようになった性の多様性をめぐる言説が、アヴァンギャルドの芸術実践と直接、間接にかかわりを持っていた事実に目を向けさせることで、今後の研究における作品分析に新たな参照項を提示する興味深いものでした。

小松原さんの発表に引き続き、フランス文学の研究者である熊谷謙介さんに、主に状況主義を例に、フランスのアヴァンギャルド芸術におけるジェンダーの問題について論じていただきました。アヴァンギャルド運動の各グループは青年運動的性格を持っていて、その文脈である種のマチズモを誇示する傾向があります。シュルレアリズムの男性表象を見てもわかるように、フランスのアヴァンギャルドも例外ではありません。しかし、小松原さんの発表でも明らかになったように、アヴァンギャルド運動には、ホモ・ソーシャル性だけではなく、主に規範概念との否定的な関係の中で生まれるトランスジェンダー性も指摘できると熊谷さんは指摘します。この点を踏まえたうえで、熊谷さんは 1960 年代のフランスにおける前衛運動である状況主義の、特に以下に挙げる二つの芸術実践に注目します。まず、この運動に参加した女性芸術家が、男性芸術家の描く異性愛の物語を女性の同性愛やシスターフッドの物語に書き換える営為を通じて、ジェンダー布置を解体する可能性を探るさまが明らかにされます。さらに、その基本姿勢においてはマチズモ的性格の強い、状況主義の男性芸術家たちが、現代のスペクタクル社会の中で消費される様々な欲望の表象やジェンダーイメージを攪乱的に引用、剽窃、あるいは「転用」する過程で、欲望の拡散を狙ったクィア理論へ接近してゆく様子も論じられました。熊谷さんの発表は、フランス文学研究者をメンバーに欠く本グループの研究を補足すると同時に、いわゆる歴史

的アヴァンギャルドが先鞭をつけた、ジェンダー布置への解体的アプローチが、戦後のアヴァンギャルド運動の中でどのように継承、発展されたかを考えるきっかけにもなり、その意味でも今後のグループの研究にとって貴重な機会となりました。

発表に続く質疑応答でも、ヒルシュフェルトの中間段階理論について突っ込んだ質問が多数出されるなど、対面でのイベントならではの臨場感で議論が進みました。このワークショップ以降、新型コロナ感染症拡大の影響で、予定していたグループのイベント企画はすべて中止となり、まだ本格的な再開のめどはたっていません。しかし、今までの研究成果を発展させてゆくためにも、活動の早期再開を願いたいと思います。

日時：2020 年 2 月 17 日（月）
場所：研究講義棟 4 階　422 教室
映画解説：西岡あかね（東京外国語大学）
講師：小松原由理（神奈川大学）
　　熊谷健介（神奈川大学）